



講義の内容改善と当世岩教大生気質

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 能條, 歩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009305

講義の内容改善と当世岩教大生気質

能條 歩

1. はじめに

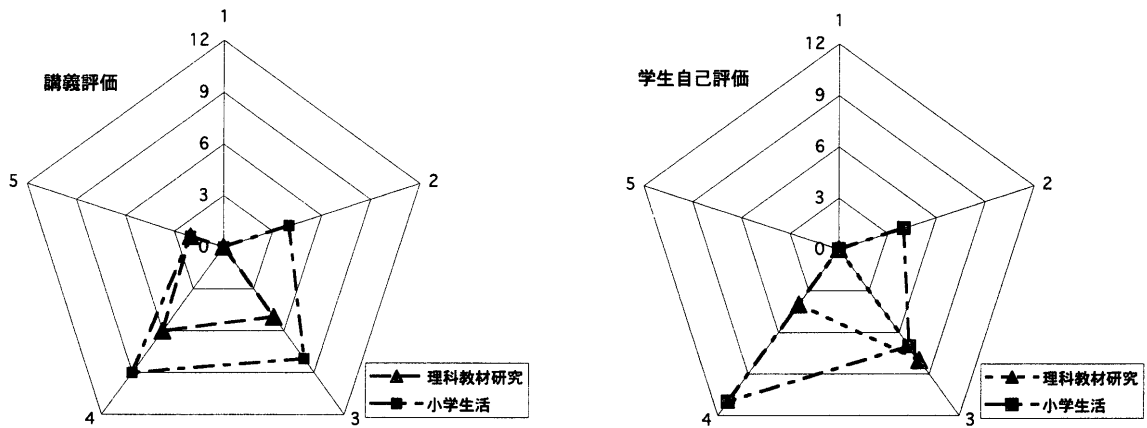
筆者が2000年度前期の小学生生活Bで使用したテキストでは、1985～1986年の臨教審答申で教育の荒廃現象が指摘されたことを示し、(当時の)こども(あるいは若者)について、「幼衰化=幼稚化」し、「指示がなければ行動できない」「他人とのかかわりを避ける」「持続力、忍耐力に欠ける」などの評価をして、生活科の導入はこれらを克服しハヴィーガーストのというような自己を磨き社会とかがわっていく能力・態度の育成をねらいとする、としている(佐島群巳、1996)。このことは、生活科導入の経緯を説明するにあたって比較的理解しやすい“背景”の一つといえるが、当時荒廃しているとされた教育の渦中にあり、前述のごとく臨教審に評価されたこども(小学校中～高学年)はちょうど現在講義を受けている学生達の年代層である。このような現在の若者像は、実際には学生達だけにあてはまるものではなく、三無主義・しらけ世代・新人類と呼ばれた筆者らの年代にとっても耳の痛い部分が大いにあり、ここで議論する岩教大生気質を(過去とは違う)当世学生気質に特有なものとして扱うことが妥当か否かの議論もあろう。しかし、そうした議論は別の機会に譲り、本論では主に近年特に強く求められている講義改善の一環として、「講義を効果的に行うためには、まず学生の実態を的確に把握する必要がある」という視座から、筆者が1999年度後期に(現在全学的に取り組んでいる評価活動とは全く関係なく)実施した学生への評価アンケートをもとに、学生の講義に対する意識とそれに対する対応の具体例を提示し、本学における講義についての“傾向と対策”を論ずることとしたい。なお、本学では2000年度から大学における講義改善の一環として、講義の相互参観その評価を行っており、筆者の公開した生活科教材研究の講義は、本論で検討された“傾向と対策”に基づいてデザインされた。この原稿を執筆している時点では、その公開した講義に対する評価は定まっていないので、本論における考察の有用性については未だ検討の余地が多く残されているといえるが、ひとまず現時点での検討結果を示してみたい。

2. 学生の講義評価アンケートから

本アンケートは、1999年度に筆者が北海道教育大学岩見沢校で担当した小学生生活Bおよび理科教材研究Eにおいて実施されたものである(アンケートの内容は資料1参照)。アンケートは、無記名で提出を強制せず、配付から提出期限まで期間を与えたため、回収率はそれぞれ36.7%・36.1%とあまりよくない。提出した学生は比較的まじめな学生が多いと推定されるため、この結果の集計をもって講義評価を定量的に取り扱って一般化することには危険であろう。しかし、内容的には学生のさまざまな意識が反映されていると考えるに足るもので、定性的な分析を行うことは可能と判断したため、以下にその集計と簡単な分析結果を述べる。

a) 講義内容について

講義内容についての評価は、5段階評価による学生の講義内容評価と学生の講義に対する取り組み方の自己評価とを組み合わせることで評価することとした(第1図)。講義内容に関する評価に、学習者側の取り組みに関する自己評価を組み合わせる理由は、講義は学習者と教授者の両者により作り



第1図 講義に対する評価

上げられるものであると考えているからである。

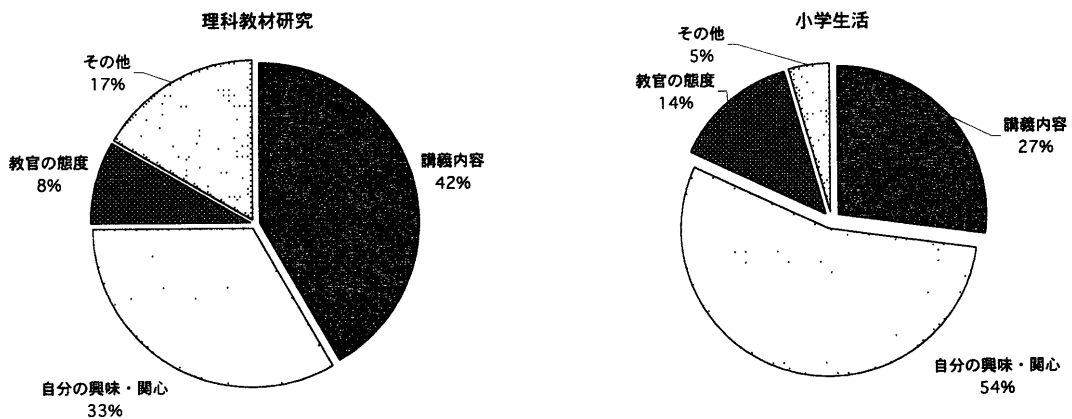
この結果では、いずれにも低い評価のものが見られないが、これは低く評価していた学生がアンケートを提出していなかったためとも考えられる。講義に比較的真剣に取り組んだ(つमोरりの)学生にとっては満足度が比較的高かったということであろうか。

ところで、アンケートは自由提出だったため、提出した学生は比較的“真面目な”学生と判断して差し支えないと考えられるが、そうした学生の自己評価においても「大変よい」とするものがないという結果をどのように判断したらよいだろうか。このことは次項でアンケートの別項目である自己評価の原因(第2図)と絡めて考えてみたい。

b) 講義に臨む姿勢について

まず第2図から、理科の場合は講義内容が、生活科の場合は自分の興味・関心が、講義に臨む姿勢を左右する要因としての割合が高いことがわかる。これに前述の自己評価結果をあわせれば、

- ① 生活科はまだ導入されてまもない教科のため、学生自身に授業を受けた経験がない。そのためどんな教科であるかという興味や関心が学生の講義に臨む姿勢に反映しやすい、
- ② 自身のこれまでの授業体験からすでにイメージ(好き・嫌い、楽しい・楽しくない)ができあ



第2図 講義に臨む姿勢は何に左右されるか?

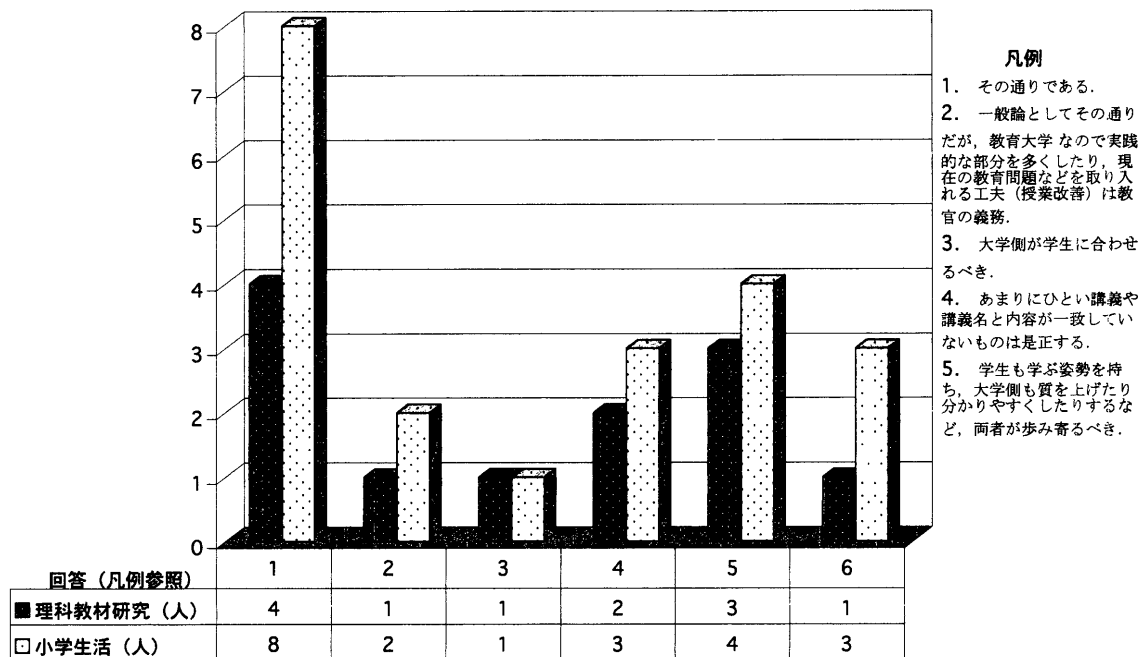
がっている理科については、「(理科が嫌いなので¹⁾ 講義が“おもしろい”ものであればとりくめるし“つまらない”ものなら積極的に取り組みない」派と、「(理科が嫌いなので) 積極的に取り組みない」派、とがいた²⁾、

ということになるのではないだろうか。このことは、高等学校まででなじみのある科目（例。理科・国語）と大学で初めて接する科目（例。生活科・哲学）の講義内容を検討する際に、どのような傾向をもって講義に臨む学生が多いかを教授者側が知り、講義の展開をそれに沿って計画するために留意すべき一つのポイントといえるかもしれない。

c) 学ぶ姿勢

このような学習者側の学ぶ意識の問題は、大学教育に求めるものにも現れていると考えられる。そのことをはかる一つの例として、「大学における授業改善の是非」についての新聞の投書を示し（資料1参照）、それについての見解を問うた（第3図）。

投書への見解は、「自ら学ぶ姿勢を持たない学生が悪い」「これ以上講義の質を落としてほしくない」というのが圧倒的であった。しかし、一方では「学生を無視したあまりにひどい内容」「教育大なのに教員になったときに役立たない（だろう）」「タイトルと内容が違いすぎる」講義があるという声もある。ただし、提出した学生は比較的“まじめ”な者が多いと考えられるので、この結果をもって学生の大多数が「講義の質を落としてほしくない」と考えていると短絡することはできない。とはいえ、少なくとも“まじめ”な学生の大半が「まず学生が学ぶ姿勢を持つべき」「最近の学生はよろしくない」と考えていることは興味ある点である³⁾。



第3図 投書に対する見解

¹ ちなみに理科教材研究の講義中に尋ねてみると、「理科が嫌い（または苦手）で、できるなら教員になっても避けて通りたい」と考える学生は90%前後となる。

² 筆者の担当した理科関係の講義には理科の専攻生はほとんどいなかった。

³ このアンケート項目については、文末に全回答をそのまま掲載した。学生の生の声を知るといって参考にしていただきたい。

大学での講義をサービス業の提供する“商品”の一つとして考えた場合、多数の学生の声は、“顧客のニーズ”としてある程度尊重しなければならないだろう。したがって、学生の中から講義を「分かりやすく」「面白く」「体験的に」「(教壇に立ったら)役立つように」といった要求がある(または内在する)ならば、それに対して一定の対応をする必要があると考えられる。また、ある水準に達した学生を送り出すということが社会から大学に付託されたものであるなら、これまでのように予定調和的な教育が成り立たないとすれば、従前から前提とされてきた大学における基礎・基本より前のレベルから大学教育が始められなければならないことも、認めなければならない現状かもしれない。しかし、大学側が学生に合わせた教育内容を考えるように変わっていくことも当然ではあるが、一方で少数の(?)学びたい欲求を持っている学生に対してどのようなケアを行うかも考えなければならない。このアンケート結果は、取りざたされているような知識という意味での学力(学んで身に付けたもの)よりも、学びに対する意欲(学ぼうとする力)の点でその低下が著しく、同一の大学内においても学生間に“学力”のばらつきがあって、統一の処方箋ではいずれの学生に対しても十分な対処ができそうにないことを示しているように思われる。この現象は、これまでの大学が高等学校の都市部の進学校のようにある水準の学生だけが集まっていた集団から、地方の普通高校のようにさまざまな“学力”の生徒が混在する集団に変化してきたと表現することができるかもしれない。たとえば北海道の地方の高等学校では、特に他の学区の高校への通学が困難な地域においてこのような現象が頻繁に見られる。こうした地域では、過疎の現状もからんでほとんど定員割れぎりぎりの状態にあるため、地域の中学校の生徒のすべてが入学できる。その意味では“自然学級”状態になっていて、中学校と同様に“学力”にさまざまな差異が見られる。これらの高等学校では、進学まで考えている成績上位者と不適応状態に陥りがちな成績下位者の混在する教室で、如何に両者の興味を持続させかつ成績の向上をはかるかが常に古くて新しい課題となっている。極端ではあるが、大学もこうした学校における教員の実践に学ぶ要素が大きい時代に入ってきているのかもしれない。

3. 講義への反映

前述のアンケートの結果が示す学生の意識や要望に基づいて、2000年度に実施した講義において行った改善点について以下に述べる。これらの改善は、学生の要望に応えることとともに、教授者側の“教えるべき(教えたい)ことがら”をも保証することに留意して計画したものである。なお以下の中には、昨年度にも行っている講義運営法が含まれているが、本論で紹介した学生の講義評価にかかわる部分も含まれると考えられるので紹介する。

a) 講義の前提

筆者は講義開始時のガイダンスにおいて、その講義をどのような受講生を想定して行うかを示している。たとえば小学生生活や理科教材研究においては、

- ① 本講義は小学校教員の免許取得の必要条件となっている単位である。
- ② したがって、受講生は全員小学校教員になると仮定して講義する。なぜなら、運転免許保持者が(上手かどうかは別にして)自動車の運転ができると見なされるのと同様に、小学校の教員免許保持者は少なくとも小学校の各教科についての一通りの見識を持っていると見なされる(場合がある)ためである。

と説明し、すでに教員以外の進路希望を固めている学生もふくめて受講にあたっての“覚悟”を持つように促している。さらに、講義で示す内容の具体化を期待して、「皆さんがこちら側(教壇)に立った場合どうですか?」という問いかけを多用している。また、教授者側に回ることを前提としているということで、以下の行為をそれぞれ→以下の説明をつけて厳しく禁止すると宣言してい

る。

- ① 遅刻・講義中の出入り・携帯電話→「講義が中断されるとともに、講義する者の気分を害し講義環境が損なわれて効率的な講義が保証されないため。」と話す。
 - ② 私語→「講義中に私語があるのは講義がつまらないであり、（私語がいけないのはわかるが）このような規制は方向がおかしいのではないか？」という指摘が学生からあったので、「そのようなことは講義者が反省することではあるが、仮に講義がどんなにつまらなくてくだらない内容と思えても私語してはいけない。受講者の中にたった一人でも聞いて学びたいという者がいた場合、その学生の学習権を侵害する行為である。」と説明している。
 - ③ 講義中の飲食→言わずもがなではあるが、実際に起こったので念押ししている。
- ちなみに、筆者の講義ではこれらの禁止事項はほとんど守られている。

b) 講義と授業との違い

前述のアンケート結果から、「いわれる通りに学んでいれば教員としての素養が身に付く」「講義を受講することで教員になったときにすぐ役立つことが示される」といった講義に対する“幻想”が根強く、自らどう学ぶかという視点に乏しい受け身の姿勢が際立って見える。そこで、これまで児童・生徒として受けてきた学校の「授業」と大学での「講義」は、基本的に違った要素を持っていることを改めて示すことにした。学生に対する説明は、かいつまんでいうと「授業はある目標があって（できるだけ）全員がそこに到達できるように教員が“牽引”するもの、講義はあるジャンルに関する体系や哲学を示すもので、いってみれば“ちょっと詳しい目次”のようなものである。したがって、授業は生徒にとって受け身の場面が多くなるし、教員はできるだけ目標へ到達できるように工夫することが求められるが、講義で取り扱われた体系や哲学に対する理解を深め自らのものとしたいならば、当然自分の主体的なアプローチが必要とされる。」というものである。大学教官も学生の理解を深められるような努力と工夫をする必要があるのはいうまでもないが、それとは別の次元で学生の意識改革をはかる必要があるように感じられるからである。なお、投書についてのアンケート結果に見られるように、学生の中には少なからず「大学では講義の質を犠牲にしてまでわかりやすさを求める必要はない」という意見が見られるので、こうした提示も抵抗なく受け入れられていると考えたい。

c) 役に立つ講義

学生アンケートには、少なからず「教員養成大学なのだから教壇にたつてすぐ役立つ講義を」「教育実習で講義が役に立たなかったので何とかして欲しい」という視点の回答が見られる。目的大学のためこのような意識の学生が多くなるのはある程度仕方ないとしても、学生の望んでいる“マニュアル”の伝達は教員のように多様な生徒を扱う仕事の場合“教育的”とは思えない。教育活動は本来“個対個”のものであり、同じ学年の生徒であっても、個人であれば個性があり、集団であれば集団の特性がある。したがって、ある個人（または集団）に対して有効な実践が、普遍的に有効性をもつということはほとんどない。これまで生徒として自身が体験した小・中・高校での授業の運営が自分にとってどうであったかを考えれば、たちまちにしてそのような方法論があるはずがないということに気づきそうなものではあるが、常に受け身で授業に参加してきた学生にとっては仕方がないことなのかもしれない。筆者はその対処法として以下のような説明を行っている。

- ① すぐ役に立つ講義は、家電製品のマニュアルのようなものである。電子レンジのマニュアルは電子レンジを使いこなすにあたって大変有用であるが、それを使ってもビデオを使いこなすことはできないだろう。しかし、「電気〇〇学」のような体系的学問は、直ちに電子レンジの使い方を示さないかわりに、あらゆる家電製品の基本になっている仕組みを類推させる。それを学ぶことで必要なら家電製品をつくることさえできるかもしれない。したがって、すぐに役立つ

ちそうもないことこそ汎用性がある重要な内容を含んでいるのである。

- ② 同じ講義を聞いても何かに役立たせる人とそうでない人がいるだろう。ある情報が役に立つか否かはそれを活用する側の問題であり、たとえどんなに役立ちそうだと思って情報発信しても受け取り手がそれを役立たせようとしなければそれまでである。つまり、講義の内容も同様に、役に立たせられるか否かは受講生個人の問題に帰着する。どのようなことでも役に立たせられるような真の“教養人”を目指すべきではないか。

d) 質問書方式

幾人かの本学教官も実施しているということが最近わかったが、筆者は田中(1995)を参考にし、毎回講義に関する質問書を提出させている。内容は「今日のナットク」「今日のギモン」「感想」の3構成で感想以外は必ず記入することになっている。記入にあたっては、

- ① 今日のナットク→今日の講義で初めて知ったこと、納得したこと、驚いたことなどを「今までこれこれと思っていたが、〇〇だと聞いて納得できた」という形で書くこと、
② 今日のギモン→「能條はこういったが、自分はこう聞いていた。どちらが正しいのか?」といったように、そのギモンがどのような考えのものに出てきているのかがわかるように書く。

の形式を指定し、それが守られているか否かを評価する、としている。また、次回の講義で「ギモン」に対してコメントするようにしている。すべてのギモンにはもちろんコメントできないし、調べればわかるような「ギモン」に回答する必要もないので、コメントは筆者の見解を問うようなものと講義で説明が不足していたものを中心としている。20分前後がこれにあてられるため、学生からは長すぎるという意見がある反面、教官個人の考え方がよくわかって(講義の部分より)いいという意見も多い。また、「ギモン」を取り上げることで他の学生の考えていることが見えて面白いという意見も少なくなく、学生同士のコミュニケーションも不足していることが伺える。

4. おわりに

教授する側のさまざまな事情を抜きにしても、学生の要望には応えられるものと応えるべきでないものがある。その意味でも、「時代が移って学生の質が変わっても、大学はそれに迎合するばかりでなく、ある一定の水準と質を保つべきである。学生の実態がかけ離れていたとしても、基本的には学生の方が努力して追いつくべきである。」という投書の内容をほとんどの学生が支持していることは、注目に値する。しかし、現実には予定調和的な教育、すなわち言外にある教授者側の意図を学生が斟酌するということがほとんど期待できないため、本来なら応えるべきでない問題に対してもなにがしかの姿勢を示す必要がある。したがって、本論で示した中には、そうしたいちいちこたえるべきでないような要望に対する対応も含まれている。これらの対応策で十分という保証はまったくないが、当面の説明責任を果たしたものと考えたい。いずれにしろ、今後もこうした対応は折りに触れ考慮してゆかなければならないことであり、終わりのない改善活動ともいえる。

「習ってないのでシリマセン!」と自分の専門に関することでさえ言い放つ学生に対して、「わからなければ自分で調べたらどうなのか?」といえ、ば、「調べましたよ!でも、キーワードで検索してもヒットしませんでしたので。」という禅問答のようなやり取りが日常化しようとしている。これまでのような教授者側の姿勢は既に成り立たなくなっていることには、多くの賛同が得られるだろうが、「どのように学生が感じていて、それにどのように対処すべきか」、ということに関する万能の処方箋は現在のところ見つからない。私たちは学生にマニュアルを要求しないようという一方で、自らは対症療法のマニュアル探しを他者に依存してはいないだろうか。そういった反省を含めて、講義の評価アンケート結果の一部とそれに基づいた検討結果を述べた。筆者の講義はいつでも公開されているのでごらんになった方には、本論に示した筆者の講義運営の基本姿勢について是非ご批判とご指導をお願いしたいと考えている。

文 献

- 佐島群巳、1996、1 生活科の性格。教員養成基礎教養研究会・佐島群巳・奥井智久編、1996、教員養成基礎教養シリーズ 生活科授業研究。教育出版、3-10.
- 田中 一、1999、さよなら古い講義－質問書方式による会話型教育への招待－。北海道大学図書刊行会、245 P.

〈参考資料1. アンケートの内容〉

講義に関するアンケートのお願い

今回の能條担当の講義はいかがでしたか？通知表をつけるつもりで以下のアンケートに御協力ください。なお、提出は（欄は作りますが）記名・無記名どちらでも構いませんし成績とは全く関係ありません。講義名だけは忘れずに書いてください。評価については、基本的に能條の担当した部分の評価をお願いします。非常勤講師の扱った内容について記載する場合は、どの部分が非常勤講師に対する評価かがわかるようにしてください。

講義名

学生番号・氏名

1. 今期の講義についておたずねします。

1. 講義全体の総合評価を5段階で示してください。その場合、他の講義と比較（相対評価）を加味した上で、この講義自体がどうであったか（絶対評価）を判断してください。
5（大変よい）・4（よい）・3（悪くはないが良くもない）・2（悪い）・1（最悪）
2. 講義全般に関する所見を書いてください。所見とは「この点は評価できるがこの点には問題がある」といった“批評”のことです。
3. もっとこんなことをやってはどうかという提案・アイデアがあれば教えてください。

2. あなたのお考えについてお訪ねします。

1. この講義に対する自分の姿勢についての評価をお願いします。他の講義と比較（相対評価）を加味した上で、この講義自体がどうであったか（絶対評価）を判断してください。
5（大変よい）・4（よい）・3（悪くはないが良くもない）・2（悪い）・1（最悪）
2. 上記のあなたの姿勢に対する評価がそのような状態になったのは主にどのようなことが原因でしょうか？
ア. 講義の内容が良かった（または悪かった）ため。
イ. 自分の中に始めから興味・関心があった（またはなかった）ため。
ウ. 講義の内容自体というより担当者の態度や人間性。
エ. その他（以下に書いてください）
3. “疑問と納得”の質問書方式についての御意見ををお願いします。

3. 以下のような新聞の投書を見かけたことがあります。（記事は家庭の主婦（40歳代？）からのもので、朝日新聞に掲載されたと思います。実物は探したけれど見つけれませんでしたので記憶をたどって要約を紹介します。少し脚色しているかもしれませんが）。ぜひ、皆さんの御意見をお聞かせください。

「最近、大学の先生達が授業改善に取り組みだしたと聞く。学生の学力が低下したとか、講義中に私語・携帯電話・飲食があるなど常識が欠如しているとか、大学の講義が昔風のものでは理解してもらえないので今の学生に合わせなければならぬと言った理由で、改革が必要だということのようだ。しかし、大学は義務教育ではないので、学費をかけて学ぶためのところ

に自らの意志で集まってきたものに対して大学の方が“迎合”する必要があるとは思えない。変えていく必要のある部分はあるかもしれないが、(昔から) 大学で大切にされてきた内容や自らが学ぶという大学の本質を薄めてまで、授業改善する必要はないと思う。講義が仮に難解であっても、まずは学生が勉強してみてその後質問に行くのが筋である。学生の学力が昔と比べて低くなったからといって大学が必死に対応策を探ることよりも、学生の方が大学の教育・研究内容に合わせて足りない知識を自ら学ぶべきではないか。学ぶために大学へ進学するとはそういうことではないか。また、そうでなければ大学教育は非効率的でどんどんレベルが低下するのではないだろうか。」

4. 講義に関する自由な感想をお願いします。

〈参考資料 2. 投書に対する見解 (アンケートに記載されたまま転載)〉

- 「この人の言うことも一理あると思う。確かに最近の大学生は (私も含め) あまり、「勉強」を意識して、学校に通っている人は少ないだろう。しかし、うちの大学に関していうと、私が思うところでは、教育大学なのに、実際現場に行った時に役に立ちそうな講義、言い換えれば「教師」としての将来のために必要である (免許のためでなく、内容的に) 講義というのは、少ないのではないか。それ以外にも、たとえば社会に出たときに役に立つような口頭発表の能力を培う講義などもゼミぐらいしかなく、他はすべて先生がだた1時間半しゃべっているだけだったりして。こんな現状の大学では学生が、熱意をもって勉強するのも、なかなか難しいのではないか (無記名)」
- 「普通の大学ならば、この主婦の言うことはもっともなことである。しかし、ここは「教員養成課程」の大学である。講師たるものいかなる手段を用いても教員の養成に努めるべきである。だから、主婦のいうような“迎合”ではない。養成を担う講師なのだから、授業改善は一つの義務なのである。特に「小学〇〇」「〇〇教材研究」といった類いには、上述したことが顕著に現れていいはずだ (2年男)」
- 「言っていることは全くその通りだと思う。しかし、日本の大学の大半は私立であり、いわば会社と同じであると思う。極論を言えば学生を集めて利益がなければその学校はつぶれてしまう。そう考えれば学校側が「経営方針」を改善することは当たり前である。しかし、学生がだらけているのはやはり学生の問題ではある (自分も含め) 両者が歩み寄って、刺激しあい、レベルが上がれば最高ののだが。(2年男)」
- 「確かに学生側の態度が悪いと思います。常識として、やっていい事と悪いことがあると思います。その点については学生が反省すべきだと思います。しかし先生方の中にも、講義名と内容が一致していない先生もいるので、そういう点は改善してほしいです (無記名)」
- 「大学とはいえ、自分の好きな勉強だけするわけにはいかない。単位のためになってしまう授業もあるので、大学側の歩み寄りも必要だと思う (2年女)」
- 「確かに学生も反省しなければいけない。しかし、大学側が改善するのも当然。昔風の講義が必ずしも良いとは言えないし、向上しようとしなれないのはおかしい。世の中の変化にみんながついていかななくてはと思う (2年女)」
- 「私は以前、とある講義のやり方 (教官の授業姿勢) を猛烈に批判したことがあります。それは、教育という問題を語るその教官の授業に、学生に「教える」事を考えたあとが、あまりにも希薄だったためです。その教官は私の批判を彼への個人攻撃ととったようですが、無論そうではありません。教育を教える教育大学は、いつまでも現制度に固執することなく、教育のあるべき姿に変わってゆくべきではないでしょうか。学問的な (日本語文法とか) 講義はともかく、「ともに考える」姿勢が、講義に望まれないでしょうか (無記名)」

- 「この主婦は、はっきり言って現場を知らなさすぎる。学問の内容というのは日々変化する。それとともに、社会が求める学問の質というものも変化する。特に教育大学の教員養成大学では、現場の子どもたちの変化によって、教えるべき内容だって変化する。そんなこともわからない一般の主婦にこんないいかげんなことを言われたくはない。この主婦はもっと社会が求める大学、社会の変化によって学問も変化するということを学んでほしい（無記名）」
- 「この主婦の意見に同意します（無記名）」
- 「たしかに義務教育ではないけれど、高い授業料を払っているのだから、それなりに内容のある講義はしてもらいたいと思う。授業中の私語だとかはきちんと話を聞いている人もいるのだからそれは最低限のマナーだと思う。私も時々うるさいと感じることがある。常識が欠如していると感じるときがあるのでそういう人は排除してもかまわないと思う。学力の低下に関しては、受験の時あんなに勉強したし、そういう環境にあったものが、大学にはいりそういう環境ではなく、講義もあまり受験でやってきたことと別なものが多いので一気に忘れるし、勉強しなくなって低下するものだと思います。私も実際そうです（2年女）」
- 「この記事を書いた人の言う通りだと思う。学生を甘やかしてはいけない。これ以上、大学教育のレベルを下げてほしくないです（無記名）」
- 「私は、1年生の「情報機器の操作」という講義で先生の手伝いをしています。先生が話しているのに、私語をしていたり、携帯電話でメールを送ったりしている人がいます。そういう人にかぎって、次の操作がわからず質問してきます。今の学生には、常識がなく、小学生と同じで自分が楽しいと思うことしか興味を示さず、やろうとしないように思います。ある程度の試験に合格してはいつてきたのですから、その学力を維持するためにも、入学と同じくらい卒業も難しくすればいいのではないかと思います（無記名）」
- 「大学生が授業中に私語をしたり寝ていたり和不真面目な態度が目立っているというのは、最近テレビでも話題になっていたりしていますね。学生と教授、どちらに責任があるのか。個人的には7対3で学生の方に責任があると思います。大学は勉強するためだけの場とは決して思いませんが、大学=勉強の場という考えが1%もない奴もいます。単位認定をもっと厳しくしてもいいと思います。ところで、7対3ということは、個人的に10分の3は教える側に責任があるということです。大学は中学・高校に比べて、講義の中身が専門的でより深いものになるので、教える側もその研究分野に精通した人であるべきです。しかし、優れた研究者=優れた教授たりえないと思うのです。専門的になる分、その分野に全く興味の無い学生もいます。教える側は、聞いている学生が少しでも興味を引くような講義を心がけるべきで、興味を持たなくても、その分野の知識が少しでも身につくような工夫をすることが教授の責任なんじゃないですか。ただ、自分の研究していることをたんと話しているような教授がたまにいますが、そういう人は、学生を相手にするのではなく、ひとりの研究者として、その分野の他の研究者を相手にがんばってほしいです。大学の方が授業改善する必要がない？そうすれば「大学教育は非効率的でどんどんレベルが低下する」でしょうね。学生は、大学に来た以上、どんな分野にも好奇心をもって授業に望む姿勢が大切なのは当然ですが、教える側も、その分野に全く無知な人に、少しでも興味を引き、理解させるような努力をすることも当然のことだと思います。ここは「学会」ではなく「大学」なので。から。（無記名）」
- 「学びたくて大学へ入ってきてても、不当に入りたい研究室に入れないということが現実にある。（たとえば9人いて3人ずつ別れて入ったほうが平等だろうという理由など。）そういったところは迎合すべきだと思う。この人の言うことにはある程度賛成だ。学生はもっと自ら学ぶ姿勢を見せるべきだし、大学は金をもらっているのだから迎合すべきところは迎合すべきだ。そのバランスをとることが大事だと思う。わからないのは大学側の責任だと思うし、努力しない（やらない）のは学生の責任だと思う（2年男）」

- 「大学はたしかに、勉強したい人が入るところで学生が努力しなければならないと思うのですが、実際は自分の興味のあるものだけをやっているわけではないので、興味のあるものは努力すると思うのですが、その他の講義については、単位をとることが目的となってしまおうと思います（無記名）」
- 「確かに、講義中の私語や携帯電話などは、最近ますます増えてきているように感じる。昔の大学生の様々はわからないけれど、今も昔も大学は自分が勉強したいから来ている場所なので、大学側が学生に合わせて授業を改善することは特に必要ないと思う。ただ、「もっと話の上手な（人を引きつける話をする）人が講義をしてくれればいいな。」と思うことはたまにある（2年女）」
- 「学生も変えていかなければならないことは多いと思いますが、おもしろくない授業をしたり、授業に工夫の見られない教官もいます。そのような教官が授業改善をすればいいと思います。そのためには、このようにアンケート方式でもいいから、学生の声を聞くべきだと思います（2年女）」
- 「学生の学習能力の低下は、ただただ学生の学習意欲の低下に起因するものだと思う。実際のところ、私も高校の時よりも勉強しなくなっている。授業改革だとか大学改革は、まず学生の意識を変えないことには成功しない（2年男）」
- 「確かに大学は義務教育ではなく、自ら学ぶ場であるが、それにしては授業料が高い割には講義がつまらなさすぎる。それというのは、講義内容に興味あるないは先生になるために学ぶ必要があるもので仕方がない。問題はその内容を伝える教官側にあると思う。ただロボットのように90分しゃべってあげればいいというものではない。これでは誰だって眠くなる。たとえば、同じ内容でも学生が全員寝るのと笑いがあっておもしろがって受ける講義があるのはなぜ？と聞きたくなる（無記名）」
- 「わたしは、大筋において上の意見に賛成である。ただ、「大学は義務教育ではない」ということに対して反論がある。確かに、大学は学びたいものが自らの意志で学ぶ場ではあるが、事実として大学入学者が高校卒業者の2人に1人に迫り、これからその比率は高まっていくことが予想される。まずは、学生の意識改革が必要だが、こうした事実から大学側からの授業改善もぜひとも必要であると考え（4年男）」
- 「全く同意見です。この大学で4年間授業を受けてきましたが、何より学生の態度などの質の低下に腹が立ちます。講義に興味がないのなら、教官に意見しに行けばいい。それができないならせめて周りに迷惑をかけないようにしていればいいのに。私語をするものとか講義室を何度も出入りするものがたくさん。僕にはそういった非常識な輩が大学で易々と単位を得て大学教授らの批判をしていることに理解ができません（4年男）」
- 「おっしゃる通り。学生の中でも「授業が面白くない（わからない）のは大学のせいだ」みたいな風潮があるように私も思います。私も怠惰な部分もあるのであまり大きなことは言えませんが、今までしてきたのは「お勉強」。大学で学ぶのは学問。自らどんどん求めないと得られるものはないと思う。得られるものがなくて困るのはその人です。それを大学が心配する必要はありません（3年男）」
- 「それは確かにその通りである。本来大学とはそうあるべきものである。しかし、今日大学へ通うことは、勉強したい、したくないに関わらず、ある種の義務教育のようになってきている。「大学」のとらえ方が変わってきているのだと思う。今、本当に勉強したい人は（最近変わりつつあるが）大学院へ行くのである。社会の意識がそういう中で、学生にだけ意識の改善を求めることは難しいのではないか。社会が変わってきたのだから、学生も変わるべきであるが、大学側も変わるべきだと思う（無記名）」
- 「確かに、大学の講義は学生が受け身である場合が多く、積極的に学習しているとはいえないか

もしれない。しかし、この大学は教員を目指している人が多いので実際教員になった時、なるために役立つ講義を期待していたのに、教官の研究についての講義を受けていても、興味を持ちづらいのは仕方がないのではないかと私は思う（無記名）」

- 「確かに学生側の態度にも大いに問題があるともいます。どのような授業であっても最低限のマナーは守るべきです。しかし、大学側になんの問題もないのかと言ったらそうは思えません。授業の中には、講義の目的が全くわからないもの等もあります。大学が学生に合わせる必要はないと思いますが、互いに改善するところは見直して歩みよるべきだと思います（無記名）」
- 「完全に学生よりの授業になる必要はないと思う。しかし、講義の序盤や「〇〇I」といった講義では学生に分かりやすいものがよいと思う。教官によっては、あまりにも学生を考えていない人もいるので、その点では改善して欲しい（無記名）」
- 「大学は自ら学ぶところである。したがって、講義の内容に合わせて、わからないことがあれば学生自身が必死に学ぶべきだという意見はもっともである。しかし、そのように必死になれるような内容の講義が少ないという事実もあるのではないか。そんなことはないのかもしれないが、自分が受講したいと望んでその講義をとっているのではなく、ただ単位をとるために仕方なく受講しているという学生に実態があるためかそう思ってしまう。学生にやる気がなければ、授業をする方のやる気も失せ、どんどん講義の質が落ちていくという悪循環ができあがってしまっている。日本では大学で学ぶというよりも、大学では遊ぶことばかり考えて勉強しない大学生ができて上がっている。私もその一人だろう。学生の質を変えないかぎりいくら講義内容を見直しても状況は変わらない気がする。講義内容よりも大学のシステムそのものを見直す必要があるのではないだろうか。学生の質を変えるために大学がまず変わるべきなのか、大学を変えるためには学生が変わらなければならないのか。どちらが先かはよくわからない（無記名）」
- 「学生側が自ら学ぶという姿勢はもちろんであるが、教授の方はそのままでもいいとは思わない。教授の専門の研究分野の話は講義でするのはいいのですが、その講義名と内容を合わせた上で行って欲しい。というのは、講義名から内容を推測し、期待して講義を受けても、内容が全く違った、教授の個人的興味で行っていると思えないものもあるからだ。必要だと思ったり、学びたいと思えば難解な講義でも学生はついてくると思う（3年女）」
- 「とても立派な意見で、全くその通りだと思います。でも、私にとってみれば、ただ大学卒というキャリアがほしいだけであって、別に講義内容はどうでもいいんです。特に「学ぶ」ことに熱意もなにもないんです。ただ卒業さえできれば（無記名）」
- 「大学は義務教育でないからといって、指導者が、学生がついてくるのを待っているだけではないと思う。学生の学力レベルが低下したことに大学の教授側の責任がないのかといえば、そうではないと思う。教員として、興味を引きつける授業をしたり、“常識が欠如している最近の学生たち”とコミュニケーションを深めることも大切なのではないか。もちろん、学生側が、自ら学ぶという姿勢をもつのはもっとも重要ではあるが。大学と大きく取り上げていろいろな大学があるし、その授業内容もさまざまであるから答えは一つにならないと思う。“教員は常に向上を目指し、勉強しなければならない”と思う。どちらか一方が悪いのだというのではなく、いろいろな方法をためすのも大切ではあると思う（3年女）」
- 「厳しい受験競争をくぐり抜けてきて、やっとの思いで大学に入学した大学生に、自ら主体的に学ぶ意欲を期待するのは難しいことだと思います。小学校から高校まで、常に学ぶ目的が外から与えられていた（将来のため、進学のため。）ため、（私も含め）多くの大学生は大学に入って“大学進学”という目的を果たしたことで、次の目的を見失いがちだと思います。それまでの学習の中で、ただひたすら暗記すること、答えを探すことが勉強することだという意識を植えつけられ、本来の学びがどのようなものなのか、味わったことがないのです。この、主婦の方の意見は、あくまで学生自身が主体的に研究に取り組むよう努力すべきだ、とおっしゃっていますが、大学入

学以前までの学習（外から与えられた目的を持った学習）を学習者自身の内からの目的を持った学習に変えていかなければ、ますます多くの、学習意欲の低い大学生を大学は入学させることになるのではないのでしょうか（3年女）」

- 「この意見に関してはもっともだと思います。しかし、能書きばかりの授業がつまらないことは事実だと思います（3年男）」
- 「昔の授業と今の授業とで、何がどれくらい変わったのかわからないので、あまり書けないが、今の学生も興味のある分野に関しては自ら学ぶ姿勢をまだ持っているのではないかと思う。だから専門＝その人の興味のある分野とするなら、専門の授業については変える必要はないと思う。ただ、それ以外の授業（特に教養）についてはやむを得ない部分もあるのではないか（3年男）」

〈参考資料3. 講義全般に関する所見（および講義に関する提案）〉

講義に関する学生の率直な感想・意見などを記載されたままに示す。理科教材研究のものと小学生生活のものとを比較すると、講義者の専門性が色濃く反映されていることが分かる。

理科教材研究E

- 「毎回ギモンについて検討するのはおもしろかったです。じつはの方がためになりました（3年男）」
- 「講義の内容が大変良かったと思います。説明の仕方については、きちんとした納得のいく根拠があり、分かりやすい具体例をあげながら説明してくださったので理解しやすかったです。問題点はないです。地層を見に行っただけでもよかったです。学生同士の意見交流（少人数で）があればもっとおもしろいのではないのでしょうか（3年女）」
- 「非常勤講師の先生が行った仮説実験授業はとても面白かったと思います。実際に地層を見たり、実験を行ったりと、体験的な授業は大切だとあらためて感じる事ができよかったです。ただ、普段の講義は“紙”でコミュニケーションをとるという感じがします。先生と私達が、言葉でコミュニケーションをとったらいと思う。私達は、この大学での4年間も生徒であり、16年間生徒という立場から、いきなり指導者になるのは、あまりにも大変なことです。1年生から専門分野に分かれているので、もっと実践的なものを身に付けたかったと思います（3年女）」
- 「最後の感想を書くことは良いと思う（無記名）」
- 「授業の始めに前回の質問に対する回答や補足説明を行っていたのは良かったが、理科の授業に関する制度的なことや教材化の手順のような内容ばかりだったので、もっと具体的にいかに教材にしていけばいいのかということなどを知らなかった。実際に使った指導案と、その授業の成功点、反省点などを考える（3年女）」
- 「教材研究ということで、理科を実際に教えるという視点から講義が組み立てられていたのが良かった（無記名）」
- 「前回の質問に答えるのは良いと思う。学生に考える場を与える（無記名）」
- 「理論を学ぶこともとても大切だと納得しましたが、そればかりだと退屈してしまいました。もう少し実践的な教材研究の方法や具体例などもまじえて教えてほしかったです（無記名）」
- 「仮説実験授業に興味があったので、その講義はすごく良かった（無記名）→筆者注；実地指導講師が仮説実験授業について担当した」
- 「講義で扱っている内容は面白かったし、私たちの疑問に答えてくれることもうれしかった。でも、その質問に対する答えがあいまいなところがあって少しものたりなく感じた。今の内容でも十分だと思うが、実践的なことも行ってほしい。たとえば「授業」など（無記名）」
- 「能條先生の講義の中では、先生自身の教育に対する考え方や熱意がこちらにも伝わってきたのでうれしく思いました。ただ、講義の内容も私たちにとっては未知のものもあるので、レジュメ

のようなものがあるとさらに理解も深まると思います（3年男）」

小学生生活B

- 「講義の話の内容が、字面を追うだけのような感じがして、あまり興味をそそられなかった。また、質問書方式で、学生の質問に答えてくれるのはうれしいが、それでもまた、教官→学生の一方的な講義に変わりなかった。実践をおりませた話や、例を挙げながらの講義だと、私も興味がわくと思う（無記名）」
- 「内容そのものは身近な題材も多く、興味を引くものも多くあったので評価できるのだが、講義が先生中心、というよりも先生のみで成り立っていた気がする。もっと学生を講義に引き込む努力をすべきだ。講義中、学生が何をやっても先生は何もおっしゃらなかった。私もそんな状況にあまんじてしまったのだが、せめて内職をしている人を注意するくらいのことはすべきだと思う（2年男）」
- 「前半の非常勤の先生では具体的な話が多かったですが、後半はちょっと抽象的だったり、理解に苦しみました（多分僕の力不足でしょう）（2年男）」
- 「講義の終わりにわかったことや疑問を書いて、次の時間答えてくれるのはいいが、答える時間が長すぎると思います。小学生生活なので、理科だけでなく社会科についても少し触れてほしかった（無記名）」
- 「講義の内容に関する説明としてはよいが、お話以外にも何か実践してほしい。理論的なことばかりでなく、もっと具体例をあげてほしい（無記名）」
- 「先生の話が長くて眠かった。質問に答えるのはいいが、それだけだったように思えた。何か体験させる授業のほうがいいと思う（2年女）」
- 「実際の現場を見れたのはとてもよかった。授業に一貫性がなかった気がした。実際に何かをする講義。レポート課題であったおもちゃ作りを授業でこどもになってしてみるとか（2年女）」
- 「前半、三角先生の講義は実際のこどもの実態をふまえていたので飲み込みやすかった。後半の「理論」はその裏打ちとなってよかった。もっと実際の授業を（ビデオでも良いので）見たい（無記名）」
- 「講義の前半を担当された三角先生の講義は実演中心の講義だったので興味を持てたが、後半の能條先生の講義は理論づくめで、あまり面白くなかった。能條先生の講義でも多少実演的なことを導入したり、単調な講義のやり方を少しあらためてほしい（無記名）」
- 「現場の先生が来てくれて、さらに小学校の授業に参加できたのは、あまり小学生とかかわることが少ない2年目にとってはよかったけれど、話が多くてずっと聞いているのがつらい時があった。実際に自分で生活科の授業を作ってみて、授業案にまとめてみる、など少し実践的なことをやっていたらどうかと思う（2年女）」
- 「テキストをもっと活用してほしいです。実際に小学校に行って生活科の授業を見学する機会がもっとたくさんあったほうがよいと思います（無記名）」
- 「生活科についての話はよくわかったが、現場に出てすぐに役立つような実践的な内容をもっと取り入れたほうがいいのではないかと思います。私達は生活科の授業を受けたことがないので、先生が考えた生活科の授業を私達をこどもと見立ててやってみせる。または、学生をグループにわけてやらせる（無記名）」
- 「内容は評価できるが、学生同士の交流がもっとあるべきだと思う。疑問と納得はコメントをつけて後日でも返却してもらいたい。もっと小学校の授業を見に行きたい。研究室でかたまつて座っているのをばらして、集団で討論をしてはどうか（2年男）」
- 「実践からかなり遠い話が多く、内容がくどく感じました。もう少し実践に近い話をしてほしい（無記名）」
- 「実際に小学校の先生が来ての講義や、小学校に行つての授業はとてもためになった（2年女）」

- 「レポートについてですが、課題の内容はよいと思いますが、提出期限はもう少し遅いほうがいいです。今の小学生の生活科の授業実践例をもっと多く教えてほしかったです（2年女）」
- 「現場の先生を講師として招くのは学校の実情が少しでもわかって良いと思う。こどもとの交流をもっと増やす（2年男）」
- 「1回1回講義を受けたけじめとして、ナットク、疑問を書かせるのは良いが、講義の進め方、内容自体に問題がある。学生主体の活動を取り入れる（無記名）」
- 「講師が2人だったため、生活科を多面的に捉えることができたが、逆に重複する点も多く、2人のパートナーシップをもっと緊密にすべきだ（4年男）」
- 「先生の講義に対しては、挙げるべき問題点がありません（4年男）」